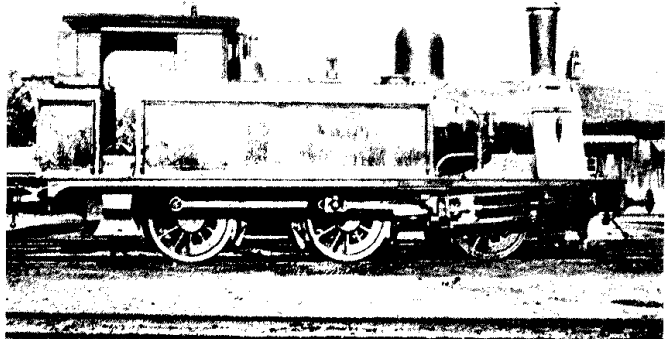
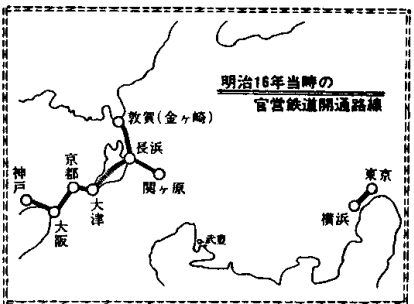
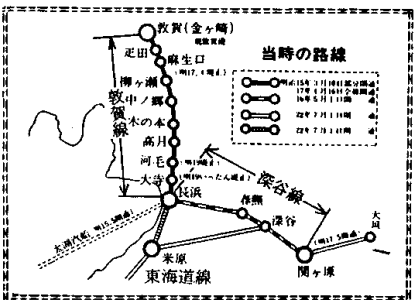


鐵路に賭けた町衆たち

北陸本線開通物語



▲湖北を走った陸蒸気



米原―長浜間の直流化の完成で、九月十四日から「長浜発」「長浜行」の電車が走りまします。新快速電車の始発駅として、長浜地域にもたらされるメリットは計り知れないものがあるでしょう。今から一世紀前の明治時代の初めにも、長浜が鉄道の町として賑わい、現代の都市的基盤が形成された一時期がありました。

東海道線がまだ開通していない明治十五年、日本で五番目に長浜―敦賀間の鉄道が開通しました。なぜ、そんなに早く湖北路に鉄道が敷かれたのでしょうか。

じつは、長浜は、日本の縦と横の結び目、太平洋と日本海を結ぶ最短距離ルート上の重要拠点、人間の体に例えればヘソの部分に位置する町だったからです。

明治政府は、開国後、欧米の先進国に追いつくために大量輸送機関を必要とし、国策の中心となった文明開化を、鉄道建設を軸に推進しようとした。そのため、鉄路で東京と京都、太平洋と日本海を結ぶことが至上課題とされたのです。

工事は、東京―横浜、神戸―大阪―京都―大津について、長浜―敦賀間の建設が急がれました。日本の表と裏を結ぶことが、産業振興と海運振興の上で何より急務とされたようです。京都―神戸間の測量も始まっていなかった明治四年に米原―敦賀間の測量が開始されていることからそのことがうかがえます。米原―大津間は建設費の軽減を図るために鉄道連絡船となりました。

水陸交通の基点を米原から長浜に移すことについて、当時の古文書には、①長浜は湖辺屈指の市街で四方の貿易もとより多い ②養蚕が盛んで興すべき産業も多い

③鉄道機能が充分發揮でき採算不安も少ない

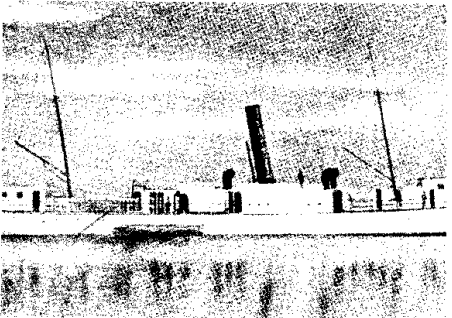
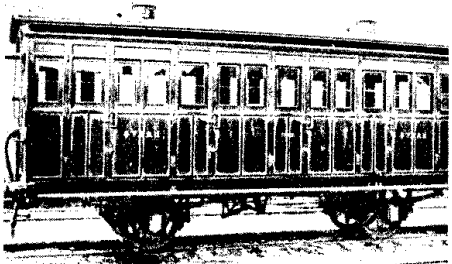
④湖畔に良好な堀あり水陸接続に至便

⑤長浜には米原を経ずして関ヶ原へ出る道がある――などの理由が記されています。

長浜町民の反対で鉄道基地が米原へ移ったという話をよく聞きますが、事実はその逆だったのです。

町民の誘致運動実を結ぶ

明治十年には、長浜町有志総代の名でステーション設置願が出されています。県内各地で鉄道反対の動きがあった中で、いち早く誘致の名乗りをあげています。同十二年には、豪商・浅見又蔵が、長浜―関ヶ原間の鉄道建設と長浜―大津間の鉄道連絡船は民間人の手でやろう、と町民に出資を呼びかける一方、政



府に願っています。

その結果、長浜ステーションの開設が決まり、関ヶ原線は国営となりましたが、鉄道連絡船は民営となり、浅見又蔵の経営する太湖汽船が連絡船運航にあたりました。駅舎は町民の希望を入れた豪華駅となりました。

長浜町民が鉄道に賭けたものは何だったのでしょうか。生系の外国貿易などで江戸へひんばんに出入りしていた長浜商人たちが、陸蒸気の走るさまを見て、「これからの時代はこれだ!!」と鉄道の将来性と有利性を見抜き、町の発展を期したからにはかなかった、と言えるでしょう。

鉄道開通によって、町は賑わいました。長浜―敦賀間が全通した明治十七年当時、駅付近には旅人宿三十八軒、運送店十五軒、飛脚

業四軒、人力車七十二両を数え、活動写真館、カフェーという新しい娯楽場もでき、料理店や商店、住宅も急増しました。

いっぽう、警察署、郵便局、電信局、登記所(裁判所)などの新しい公共施設もでき、道路の改修、架橋、河川の改修なども進みましました。こうして、明治十六年に六千六百六十五人だった長浜町の人口は、明治二十一年には九千七百四十六人と、五年間に一・四倍にも増加しています。

旧長浜駅は文明開化記念物

当時の駅舎は、新橋駅を模した設計で、鹿鳴館調の内装が施されました。木骨構造石灰コンクリート造り二階建て、四隅の角は花崗岩の切石を積み、窓枠や出入口にはレンガを使い、暖炉をつくりました。屋根組みは当時最新技術のトラス工法を用い、回り階段や彫刻入り欄干とするなどハイカラな洋館でした。この最新技術、デザインは、その後の町の建築物などに大きな影響を与えました。

人の動きがひんばんになる中で、明治二十年には私設迎賓館・慶雲館もできています。その後鉄道は、長浜―関ヶ原間が急勾配路線のため輸送力が限界に達し、新線建設が必要となり、ルートが米原経由となって長浜駅の使命は終わりましたが、今回の直流化の実現で、夢よ再び!! 鉄道を軸に長浜の活性化に弾みがつくことを願わずにはいられません。

—道標をたずねて—

湖北のみちしるべ

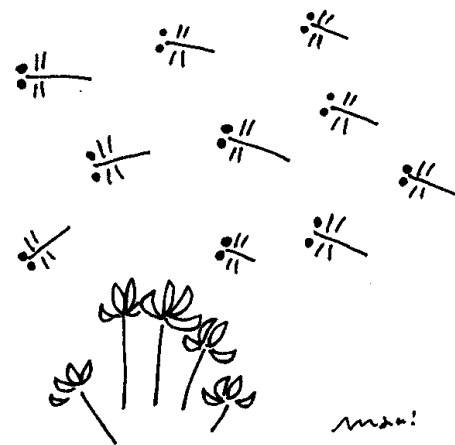


湖北は、京阪神・東海・北陸の分岐点に位置する交通の要衝。古来、幾多の旅人と文化が湖北を通り過ぎていった。だから、湖北にはみちしるべが多い。昔、高札が立てられたという札の辻や集落のはずれの一本杉の下などに、自然石の道標が立っている。

「右 中山道 左 北国道」
「右 北こく道 左 京いせ道」
「左 江戸なごや道 右 京いせ道」

中山道、北国街道、北国脇往還という三つの街道が、トライアングルのように結ぶ湖北。ここは人が歩いてきた歴史が、いまの暮らしのなかに同居するみちしるべの宝庫だ。

道は未知の土地に誘うもの。湖北に点在するみちしるべを頼りにバックパッキングを楽しめば、あなたもきっと未知の湖北を体験できるだろう。



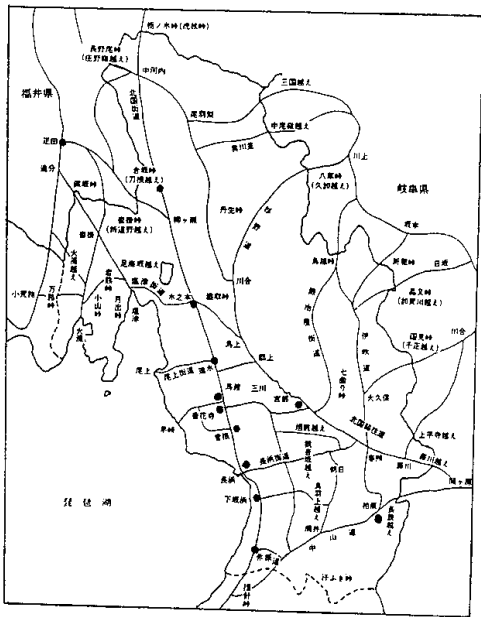
このパイパスは、いま高校生の通学路になっている。パイパスの途中に米原高校があって、米原駅と学校との行き帰りに生徒が通う道として利用されている。
どっしりとした風格のある道標だ。裏側を見ると「弘化三年建立」とある。さすが江戸時代の道標はひとあじ違ふと感心しているところだ。女子高校生が二人歩いてきた。「ここから左へ少し行くと米原中学校があるの。そして右へ行くと米原高校でしょ。だから、北国街道が中学道で、中山道が高校道なんよね」と女子高校生は言った。
江戸時代からここにしっかりと立っている道標と、ギャル語でしゃべる女子高校生を見比べながら、これもなかなか似合うのだと思っ

中山道は鳥居本の北で東へ折れて、摺針峠に向かう道になる。北国街道はここからはじまるわけで、右に行けば中山道、左を行けば北国街道となる。ところが、その北にある米原町の町なかに、もう一ヶ所、中山道と北国街道の分岐点がある。
商人宿がある辻に、傾き加減の道標があった。「右 中山道」「左 北国道」と刻まれている。つまり、ここから中山道までは、米原宿と番場宿を結ぶ昔の中山道のパイパスなのだ。
このパイパスは、いま高校生の通学路になっている。パイパスの途中に米原高校があって、米原駅と学校との行き帰りに生徒が通う道として利用されている。

中山道のパイパスは高校生の通学路 米原宿の道標

宿場まちにひっそりとたたずむ 山東町柏原の道標

「やくしへのみち」こう記された道標は、中山道・柏原宿から薬師さん（泉明院）へのみちしるべとして、柏原と長沢の道はたにそれぞれひとつずつ、ひっそりと立っていた。ひらがなで刻まれたやさしい文字に誘われるまま、道しるべに従って歩いてみる。
国道二十一号線を横切り、名神高速道をくぐり抜けると泉谷の集落。その家並の角に自然石でつくられた小さな道標を見つけた。その指す方向にあせ道を行くと、そこにも同じようなかわいい道しるべがまたひとつ。そして、今は養鶏場の敷地となっているその奥



に、めざす薬師さんが、昔のたずまいを残して静かに建っていた。
四十年ほど前は、薬師さんの法要や縁日で賑わい、子どもを連れてでかけたものだったと、長沢に住む藤田富美子さんは、そのころを懐かしむように話してくださった。
柏原はかつて大きな宿場として栄え、旅籠の名残をとどめる家屋を今に残していること、また、伊吹もぐさという名物があることなどを知っていただけの私が、今回初めて歩いてみた中山道柏原宿とやくしへの道。周辺には多くの寺院や神社があり、歴史と郷愁をそめるまち。私にとって好きなまちが、湖北にまたひとつ発見できた。

尋ねあてた道標は、V字路の先っぽに、鳶とポプラの小枝に抱え込まれて、わずかにそれらしいものが覗いていた。ペンペシと小枝類を手で押し分けてみると、「右 ほっこく」「左 京いせ」と読め、三面目はしっかりと枝に囲まれて読めない。
場所は、旧国道八号線長浜市高橋町の信号のそばの、小さな地藏堂が建っている道を、湖岸の方へ入って行って、家並みの途切れる処。狭い道なのに、湖岸の方からひっきりなしにトラックや乗用車が走ってくる。ここが北国街道として旅人を案内する大切な往来だっ

せまい街道をひっきりなしに車が通る 長浜市大成亥の道標

▶中山道と北国街道の分岐点に
立つ米原の道標

